

福島大学教育に関する卒業生・修了生・就職先調査報告書 概要

令和5年3月
教育推進機構高等教育企画室

1. 調査概要

(1) 実施時期：2022年10月1日～2022年10月31日（卒業生・修了生）、
2022年12月15日～2023年1月31日（就職先）

(2) 実施方法：

- 卒業生・修了生調査：Web調査
- 就職先調査：Web調査と郵送

(3) 回収率

- 卒業生調査：406件 回収率：7.6%
- 修了生調査：65件 回収率：13.1%
- 就職先調査：138件 回収率：37.1%

2. 分析結果の概要

(1) 卒業生調査

①卒業後の自己評価の傾向：

情報収集力（85%）やコミュニケーション力（76%）、自らを律して行動できる力（76%）を比較的高く評価する一方で、外国語（24%）やキャリアデザイン力（42%）、プレゼンテーション力（42%）を比較的低く評価している。

②在学生に対する助言「コミュニケーション能力」や「外国語能力」等の重要性：

上記の傾向と同様に、自由記述では、学生に在学中に身につけて欲しいこととして、コミュニケーション能力や外国語能力などの発信力に関連する意見が多く寄せられた。また、関心を追求する力や自主学習など、学び習慣に関する意見も少なくない。

③「情報教育科目」の重要性の指摘：

教育制度・内容の評価について、令和元年の調査と同様に、「情報教育科目」の重要性を指摘する声が高まっている（全学類：69%、各学類別（現代教養コースを除き）：上位1位）。情報化社会の進展の中で、情報教育科目のニーズが高まっていることが背景にあると推測される。

④卒業後3年と卒業後6年の卒業生による教育制度・内容の評価の違い

特修プログラムや外国語科目等の多くの教育制度・内容に対して、卒業後6年経過した卒業生は、卒業後3年経過した卒業生よりも高く評価している。卒業後6年の卒業生は、比較的中堅のポジションにあたり転職経験がある者が多く、大学の教育制度・内容の価値を十分に理解できるようになっている可能性がある。大学の教育制度や内容の評価するためには、卒業後一定期間社会で経験を積んだ人を対象とした追跡調査を実施し、その知見を大学教育の成果に関する議論に取り入れていく必要がある。

(2) 修了生調査

①修了後の自己評価の傾向：

自分たちの多角的・総合的な思考（85％）や自ら学修する習慣（84％）や情報収集力（83％）を比較的に高く評価する一方で、外国語能力（25％）や健康や運動に関する科学的認識（41％）や異文化の理解（44％）を比較的に低く評価している。自分たちの情報収集力の修得力や自ら学修する習慣が高い点は、修了生および卒業生調査に共通した特徴である。また、外国語能力が低い点も、卒業生調査の結果と共通する。

②大学院の教育への高い評価：

福島大学大学院の教育の評価について、「授業科目について目標が明確であったかどうか」（98％）、「研究指導は十分に行われたかどうか」（88％）、「自主的に学修を進めるための環境が十分整っていたかどうか」（86％）、「自主学修のための教員の配慮が十分であったか」（92％）、「修得した学力や能力への満足度」（87％）などの項目では、いずれも高い評価（8割以上の高評価）が得られている。

③大学院教育の経験と必要性の関連：

修了生には、大学院時代の授業について、どれほど含まれていたか(頻度)、どれほど必要であると考えるか(必要性)を尋ねている。その結果「専門的知識を身につける」「幅広い知識を身につける」「ディベートやプレゼンテーション」「知識や情報を集め自分の考えを導き出す訓練」のような授業は、経験頻度も高く、必要性も高く認識されていることがわかる。また、本調査では、授業内容の経験と必要性の相関をみてみると、全ての項目において有意な正の相関が確認された。これは、授業を通じて得られる経験の意義(必要性)が、実際に学生が経験することでより強く実感されることを示している。このことは、経験者でなければと大学院教育の成果を把握することは難しいことを示唆している。

(3) 就職先調査

①「自ら人間関係をつくる力」、「多角的・総合的な思考」等を重視する傾向：

福島大学出身者に限らず、採用された大卒者の働く上での能力について、企業側は「コミュニケーション力」、「自ら人間関係をつくる力」、「多角的・総合的な思考」、「必要な場合にはリーダーシップを発揮する力」、「自ら学ぶ習慣」を非常に高く評価している。しかし、卒業生の調査結果では、自らの「情報収集能力」や「自らを律して行動できる力」などが高く評価されることが異なる。

②卒業生自身と就職先による「採用・選考時の評価点」の乖離：

卒業生自身と就職先の「採用・選考時の評価点」を検討してみた結果、「成績(研究成果含む)」、「サークル等の実績」、「人的なネットワーク」では、卒業生と就職先の間には有意差がみられた(Mann-WhitneyのU検定)。特に企業側では成績(研究成果を含む)を最も重視している。大学・大学院時代の成績は就職では重視されないとも言われることが多いが、今回の調査では企業は成績を最も重視していることが示唆されている。

③卒業生自身と採用先による「大学時代の経験の重要性」の乖離：

卒業生は「専門分野の修得による考え方の訓練」、「卒業論文等の経験」、「アルバイトの経験」、「教員との交流」を重要視しているが、それと比較すると企業はこれらの経験をあまり重視していないことがわかる。一方、「研究室・ゼミでの経験」、「友人・先輩との交流」は、卒業生より採用先に重要視されている。これらの項目では、Mann-Whitney の U 検定により、いずれも有意な差がみられた。

④「働きかけ力」と「創造力」が福大生に不足している能力：

就職先調査では、福大生に不足している能力を指摘する声は非常に少ない。その原因は、他大学の卒業生との差(不足)を強く感じていないためと考えられる。しかし、「働きかけ力」と「創造力」については、不足している能力としての選択が優れた能力を上回っており、卒業生と共通の評価である。この結果は、平成 22 年度調査や令和元年度調査と同様の傾向が見られた。

⑤大学院教育の学習成果の把握の困難さ：

今回の調査では、キャリアセンターの協力を得て、就職先調査で採用した方の働く上での能力等において、学部卒業者と大学院修了者に求める能力等の違いについて探索的に調査した。その結果、殆どの回答(約 9 割)は「違いはない」といった回答が得られた。前述したように、大学院教育の成果を把握することは経験者でなければ難しいため、学部卒業が主体となる日本の労働市場では、雇用者は大学院で身につけた知識や技能、態度を評価するための観点を必ずしも十分に検討できていない可能性がある。

補足：

- ① 学類別や研究科別データは、報告書各章の第 2 節にまとめた。詳細な回答は、各章の第 2 節をご参照いただきたい。
- ② いずれの調査の自由記述でも、福島大生に身につけて欲しいことなど、非常に建設的な意見が寄せられている。個人情報保護のため自由記述の掲載を割愛した。